小樽商科大学

Otaru University of Commerce

地域のリアルな問いが教材。
生きた学びと地球規模の視野で
次世代のビジネスパーソンに

左から小林百季乃さん、幕内志歩さん、金石弥侑さん（いずれも商学部商学科2年）。「本気プロ」の「交流チーム」で、小樽の観光街である堺町通り商店街の活性化に取り組んだ

左から「本気プロ」の「中央市場チーム」の春谷今日佳さん、髙橋彩鐘さん、田村萌笑さん（いずれも商学部商学科2年）

Otaru University of Commerce

理論と実践の往復。それが小樽商大のDNA

地域と外の世界をつなぐ学生は街の「のりしろ」

小樽商科大学で10年以上続く地域連携PBL（課題解決型学習）科目「本気（マジ）プロ」。小樽の街をフィールドにした活動を通じて、学生はどう変化していくのか。同大のめざす人材像がうかがえるこの授業を取材した。

社会情報学科教授・学長特別補佐
大津 晶
おおつ・しょう／2000年、筑波大学大学院社会工学研究科修了。03年から小樽商科大学商学部社会情報学科へ。専門は都市計画。

「商大生が小樽の活性化について本気で考えるプロジェクト」、略して「本気プロ」。3～5人が1チームとなってテーマを決め、半年にわたって活動する。本気プロを立ち上げから担当する大津晶教授は語る。

「商大生の多くは小樽市外から通学しており、観光客以上市民未満の存在。市内の人と人、小樽の内と外、過去と未来をつないで新たな価値を生み出す、のりしろのようなポテンシャルを持っているのです」

2020年の前期に活動した「交流で繋（つな）がる堺町通り商店街と小樽市民チーム」、通称「交流チーム」。同チームの3人は、事前の実地調査で、地元市民が商店街に足を運んでいないという実態をつかんだ。

「小樽市民の多くは、堺町通りの店は観光客向けで値段も高いと考えていました。魅力ある商店街なのに、地元の人は『行かないのが当たり前』になっているのはもったいない。そこで、そんな先入観の少ない若者を呼び込んで、将来的にも長く商店街に親しんでもらおうと考えたのです」（小林百季乃さん）

用いたのがビンゴゲームだ。カードには番号の代わりに商店街で働く人の写真を掲載。その店に足を運ぶことでマスを埋め、抽選に応募できる。10店舗以上に協力してもらい、景品の提供も受けることができた。「大変だったはずだけれど、必死すぎて覚えていない」（幕内志歩さん）というイベント周知の努力も実り、2日間で180人以上が来訪。その半数を20代の若者が占めたそうだ。

もう一組、「中央市場の魅力再発見と持続的な活性化チーム」を紹介する。髙橋彩鐘さんの将来の夢は、公務員として地域活性化に携わること。「本気プロのことは入学前から知っていて、大学選びの理由のひとつでした」と言う。経営や金融に興味がある春谷今日佳さんと、幼少期から小樽に暮らし「地元の役に立ちたい」という田村萌笑さんと3人でチームを組んだ。

左上／PoRtaruの副代表を務める谷駿之介さん（商学部商学科3年）
右上／イベント「雪あかりの路」でボランティアスタッフ手配・管理を請け負ったPoRtaruのメンバー
左下／イベント名の「雪あかりの路」は、小樽商大のOBである伊藤整の詩集にちなんで命名された
右下／会計担当の木立舞さん（商学部商学科2年）

戦後すぐにできた小樽中央市場。長く地域住民の生活を支える一方、スーパーマーケットの出現などで客足は減り、空き店舗も増加した。3人はコロナ禍も念頭に案を出し合い、「現地に行けなくても購買につながるサービスを」と、市場のECサイト設立を決めた。複数の協力店舗の商品を詰め合わせ、自分たちで考えたレシピを同封して販売する。10月には期間限定サイトもオープンさせた。

苦労したことは何か。春谷さんは「普段接することの少ない、自分たちと違う世代の方とのコミュニケーションにも戸惑いました」と振り返る。事務連絡の方法も相手に合わせ、電話やファクス、SNSを使い分けた。前出の交流チームの金石弥侑さんは「コロナ禍もあり、お店の方にとって利益を出すことがどれだけ重要かを痛感しました」と言う。「聞く人によってまったく意見が違うこともあって、どれを採用すべきか悩むこともありました」。

地域貢献を目的にベンチャーを起業

市民はおおむね協力的だが、実地での学びでは時に行き違いも生じる。大津教授は語る。

「活動での悩みは実社会で必ず直面することばかり。そうした中で身につく生きるためのスキルは、世界のどこに行っても役に立つものです」

同大では専任のコーディネーターのほか、地域で活躍する若手社会人のプロジェクトディレクターを非常勤講師として起用。タテ・ヨコに縛られない「ナナメ」の関係から、学生の活動を指導、支援している。

「合同会社PoRtaru（ポータル）」は、「商大生レンタル」を通じて街の人の困りごとを解決しながら、小樽市民と商大生をつなぐ会社だ。起業の発端は本気プロでの取り組みだった。中心メンバーの一人である谷駿之介さんは札幌市出身。学生の3分の2が市外から通学し、小樽の街と関わらないことを問題視していた。

「僕たちの目的は学生と街をつなぎ、街のよさに気づいてもらうこと。行けば必ずその魅力が伝わると思っていました」

活動の知名度を上げるまでには苦労もしたが、リピーターもつき、利用者は着実に増加。雪かきやイベントでのサンタ役、ごみの処分など、こまごまとした多様な依頼に、谷さんたちは「市民の孫」のようになった。

「『授業なのでお金はもらえない』と言うと、『それでは申し訳ない』とパンや野菜をくれる人も多くいました」（谷さん）

料金設定を望む声にも応え、20年4月に「PoRtaru」を法人化。これにより受注できる仕事の幅が広がり、大規模なイベントのボランティア手配も請け負えるようになった。木立舞さんも、事業拡大に伴い増員された新入社員だ。7月に入ったばかりだが、「コロナ禍で普段とは違った苦労がありますが、成長を感じます。とてもやりがいがあります」と目を輝かせた。

想像以上の展開を見せる同社について、谷さんは「例えば札幌だったら、この取り組みは成立しなかったと思います。小樽の人の温かさと街の規模があってこそやれたこと」と語る。この経験を生かして、将来は観光業やマーケティングの仕事をしてみたいそうだ。

大津教授は「この授業のねらいは高等教育の学びの本質を体感することにある」と言う。「正解が用意されていないリアルな問いに対し、失敗を繰り返しながら、探索的に自分自身の答えを導き出していくことが重要です」と強調した。

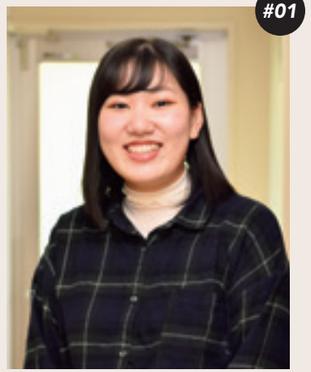
中央市場チームはインスタグラムのアカウントを開設し、ECサイトの周知にも活用している

学生の声

小樽に来てよかった！

道内だけでなく、全国から学生が集う小樽商科大学。それぞれタイプの異なる道外出身者たちが、小樽ならではのよさを語る。

#01



商学部商学科3年
及川恵理さん

私の出身地は 岩手県

寮生活を満喫 ”ここは第二のふるさとです“

「コミュ力が高い」と言われることが多い私。人と関わることが好きで、交友関係を広げたいと思っていました。出身地の東北では、興味のある経営を学べる大学が少なく、高校の先生の薦めもあって小樽商大への挑戦を決めました。

ホームシックも1日だけ 寮生活は本当にオススメ！

小樽に来てからは毎日が新発見。昔ながらの風景は大切に守っている人たちの努力の積み重ねだと気づき、この街が大好きになりました。岩手への帰省から戻ってくるとまた別の安心感もあるぐらい、ここは第二のふるさとだと思っています。

入学式前に入寮したので早く友達が作れて、大学にもすぐなじめました。一つ屋根の下にいると先輩とも特別な信頼関係ができ、いろいろ相談にも乗ってもらいました。一生付き合いたいと思える友達もできたし、大学生活はとても充実しています。

小樽商大での学びを通じて、大好きなトレンドを生み出す側になってみたいと考えるようになりました。でも就職して小樽を離れることになったら寂しいな……と、いまから少し心配しています（笑）。

卒業生にとっても思い出深いキャンパス目の前の「地獄坂」。多くの学生はバスに乗る

輝光寮（きこうりょう）は小樽キャンパスのすぐ近くにある。男女別で管理人が常駐している。共用スペースのリビングでは「コロナ禍の自粛期間中も友達と励まし合うことができて救われました」（及川さん）

#02

商学部商学科3年
糸 峻哉さん

私の出身地は 鹿児島県

留学体験で成長 ”小樽を経て自分の世界を広げたい“

僕の出身は奄美大島です。中学卒業と同時に島を出て、英語科の高校でアメリカ留学も経験しました。小樽には家族旅行で来たことがあり、街の雰囲気が気に入っていました。進路を考える時に「北海道で暮らしてみたい」と外国語教育に熱心な大学を探したらすぐに小樽商大がヒットしました。「あ、ここだ」と志望校が決まりました。

高台にあるキャンパスは見晴らしも良好。小樽市街の向こうに石狩湾が望める（5号館4階から）

大学では第二外国語としてドイツ語を履修し、2年の夏休みをミュンヘンで過ごしました。留学先への応募書類作成や滞在するシェアハウス探しなど、すべて自分で手続きをしました。また別の機会にはウガンダへの短期研修にも行きました。苦労した分、自信がついたと思います。

異文化理解を深め 世界で貢献できる人に

大学でアイヌ民族への差別を学んだのですが、奄美大島でも同様の歴史があり、北海道に来たことに縁を感じました。留学の経験も、多様性や異文化への関心を強くさせました。将来は海外で働くことも考えていますが、どこにいても、多様性をプラスにできる人になりたいです。

#03

商学部経済学科4年
寺西 空さん

私の出身地は 東京都

大学院へ進学 ”支えてくれるいい環境があります“

東京の私立に行くか小樽商大を選ぶか迷いましたが、学びたい分野を重視して小樽に来ました。

大学に入る前は、漠然と海外で仕事をしたいと考えていました。世界を見たいという気持ちもあり、大学の制度を使ってのマレーシア留学やロシアでの海外ボランティアも積極的に経験。各国に友達もできました。

でも経済学科で学ぶ中で、もっと勉強して研究職に進みたいという思いが出てきました。実は数学が苦手だったのですが、経済の勉強に生かせると思い、受講しました。その先で興味が湧いたのはゲーム理論です。いずれは研究職に就いて、企業の利益の仕組みなどを考えたいと思っています。

意欲があれば応えてくれる 親身な先生たちが魅力

小樽商大に入って一番よかったのは、先生との距離が近いところ。本当に毎週質問しに行ったし、大学院への進学を決めてからは、受験対策にもたくさんの先生に協力してもらい、大変感謝しています。この先また留学する可能性もありますし、やはり海外で働くことになるかもしれません。

街の象徴ともいえる小樽運河は夜景も美しい。この歴史豊かな街が商大生を育む

KEYWORD

小樽商科大学を もっと知るための 用語解説

▼グローカル

「グローバル」と「ローカル」を合わせた造語。「地球規模の視野で学び、地域の視点から行動する人材を育成する」という小樽商大の教育理念を表すもの。21年には留学必須の「グローカルコース」が新設され、さらに学科横断の学びを提供する。

▼ギャップイヤープログラム

入学を1年間猶予する小樽商大の施策。欧米では一般的な仕組みで、同大ではこの間に米国ハワイ州にあるカピオラニコミュニティーカレッジに留学することができる。

▼佐野力海外留学奨励金

小樽商大OBの佐野力氏（元日本オラクル会長）が、同大のグローカル教育の理念に共感して支給する奨励金。全学科対象の海外研修プログラム「事情科目」を受講する学生のうち、成績優秀な60人に給付される。学生は自費負担5万円で、カナダやニュージーランドなどで研修を受けることが可能。3～4週間の滞在費用、派遣先大学の授業料や渡航費のほとんどがこの奨励金によって賄われる。

▼緑丘会

小樽商大の同窓会組織。道内をはじめ全国に支部を持ち、その結束力は「日本国内でもトップクラス」と穴沢眞学長も太鼓判を押す。コロナ禍にはいち早く学生への援助を行ったほか、現在は21年7月の開学110周年に向けた募金を呼びかけるなど活発。創立100周年記念事業として輝光寮が開設された際も多大な支援をした。また、就職支援にも力を入れている。